

新スタッフから

私たちの暮らしと生物多様性との関わりは？

浦山佳恵（自然資源班）

「保育園でヨモギ団子作ったよ！」と娘が話す。友人宅での飲み会に行くと、程よい甘さの“フキと油揚げの煮物”を作ってくる人がいる。「実家で御柱祭があって」と小さな御柱と法被姿の子どもの写メールが届く。食やお祭りなどの行事は、私たちの暮らし中の楽しみの一つですが、なかでも山菜や魚、御柱祭ならモミなど地域の野生動植物を用いたものには特別な力があるように思われます。

私は、こうした長野県の野生生物を用いた食文化や行事と生物多様性との関わりを調べています。どこに、どんな野生生物を用いた食文化や行事があるのか。それらを支える生物資源の状況はどうなっているのか。食文化や行事の継承に影響を与えてはいないか。

最近、生態系が人間に与えてくれる利益や恵みを“生態系サービス”といい、生物多様性の保全には多くの主体によるその理解が不可欠であると言われていま

す。この研究は“生態系サービス”のうち“文化的サービス”の一端について県内の実態を明らかにするものです。

5年間の育児休暇とその前後2年間の当研究所企画情報課での勤務を経て、7年ぶりに飯綱庁舎のスタッフとなりました。どうぞよろしくお願いいたします。



久しぶりの研究室にて。
まずは市町村誌の調査から

信州にあこがれていまここに

蛭間 啓（自然資源班）

この4月に環境保全研究所に着任いたしました、蛭間啓と申します。私の生まれは群馬県ですが、子どもの頃にはよく親に連れられて信州の山岳、高原などに遊びに来ていました。群馬県下仁田町と佐久市の境界にある内山峠を越えると、ゆったりとしたスロープを下りながら、信州特有のカラマツ林が広がります。私はこの峠を越えると山岳地というテリトリーに入ったような感覚になり、とてもワクワクしたものです。高校生くらいまでは、この夏の情景とともに、信州へのあこがれを抱いておりました。部屋には手描きされた長野県の鳥瞰図がはってあり、長野県型のキーホルダーも持っていました（笑）。

その後見聞も全国に広がり、信州への思いは遠く霞がかかっておりましたが、植物に関することを専門としての飯田市での就職、そして環境保全研究所への転職という運命となりました。しばし、感慨にひたってしまったことをおゆるしくください。

さて、この研究所での私の使命は、主に植物標本室の維持管理、運営になります。收藏されている植物の標本数は約18万点におよびます。長野県産のものが約

4分の1ですので、目下県内産標本の充実をすすめているところです。私自身頻繁に野外へ出て調査を行っております。関連する自然保護、生物多様性の保全はライフワークとしております。

最後に、抱負も込めて一句。

あしひきの 山落葉松に 抱かれて
信濃の空は 八百万なる

お粗末。

